医事・文談　九百九十

《正岡子規（36）の続き》その278

子規直系の系族と養嗣子

平岸　三八

子規は数え年36歳で死去した。しかも晩年の7年間は病床の上で過した。最後の二、三年は苦痛のため阿鼻叫喚の病状で、しばしば重態に陥ったほどである。

文壇に登場してから、僅かに十年で世を去ったのだが、その病床から、俳句、和歌の革新、写生文の提唱を行って、現代日本文学に大きな影響を与えた。子規の書いた口語文の闊達さを読めば、それが現在書かれたと思えるほどである。鴎外、漱石と共に三巨星と称すべきであろう。

外出もままならぬ短い生涯で、多くの有名人と交りを結んだことは、その稀有の才能によるものである。以下にそれらのうちの重だった人について、子規との関係を記述しようと思うのであるが、それらの人の姓名は、本稿252に子規周辺の人びととして21名を挙げた。それで尽きる訳ではないが、一応それらの人と子規との関係を略述しようと思うのである。それで本稿も完結にしようと考えているのである。尤も、多くの人については既に記述した。

その前に子規の血族や死後の養嗣子について記述したい。

父正岡常尚（天保4・10・16生）は佐伯家からはいって正岡家八代となり、初め倉根半蔵の娘（天保11・8生）と結婚し（安政元・3）、安政5年嫡子数馬を挙げたが、妻は安政6（一八五九）5・14、20歳で死亡。数馬も文久2（一八六二）9・5、5歳で死亡した。

松山藩の儒者大原観山の長女八重（弘化2・6・6生、21歳）、慶応元（一八六五）10・26、33歳の常尚の後妻となる。

慶応3（一八六七）9・17、正岡常規（子規）誕生。

明治3・10・1、子規の妹、律誕生。

明治5・3・7、父正岡常尚、40歳にて病歿。八重の弟、大原恒徳正岡家の後見人となる。

以後、八重は女手一人で、6歳と3歳の2児を養育する。

母・八重はなかなかしっかりした人であった。後見人はいたにしろ、家禄奉還金一、二〇〇円をたくみにやりくりして、子規の大学入学までの生活費とした。

明治25年（一八九二）、子規に迎えられて、妹律と共に上京、子規と生活を共にし、病気の看護につとめた。

気丈であったことは、子規が痛苦にうなりつづけても、冷静に「仕方がない」と云って動じなかった。

子規が息を引きとったとき、身体の位置を直す際、肩に手をかけて「さあ、もう一度痛いと云うておみ」と云った。

子規の死後、根岸に律と住み、昭和2・5・12、83歳で死去した。

28歳で夫を失って寡婦となり、二児を養育し、東京に来てからは病床の子規の介護につとめ、来客の多いのに乏しい家計のなかで、食事を饗するなど家事万端を取りしきった。子規の没したとき58歳であったから、83歳まで更に20数年淋しい生活を送った。

観山の妻、即ち八重の母・重の父歌原松陽も儒者で、父方も母方も儒者の家系であるから、八重は厳格なしつけを受けたものと思われ、子規のために勉強部屋を増築したり、教育にも熱心であった。

子規は身辺日常についても、多くの随筆を残しているが、母がこぼしたり、身の不幸を嘆いたなどの記事は一切ない。食餌や洗面の道具を病床に運んできたり、屋敷外の井戸に手桶で水を汲みにいって、轉んで手桶の柄で胸をしたたか打ったとか、室の掃除をしながら運動会の声が聞えると云ったようなことばかりである。また興津移転の相談のための集りに、副食のおかずに何を出そう、またその材料を買いに行くなどの記述だけである。

八重の一生を忍従の一生と見るか、或は子規を世に出すための下積みの力を尽したと見るか。叔父加藤拓川、陸　羯南の如く、直接、子規を庇護、後援し、或は学費を給した旧藩主久松家の育英事業常盤会の如くには、八重の努力はあらわれないが、この母なくしては、子規はないのである。